

最終成果報告書

報告者氏名：赤嶺太亮 所属：沖縄県立大平特別支援学校 記録日：平成 29 年 2 月 10 日

キーワード：コミュニケーション、見通し、要求表出

【対象児の情報】

○学年：小学部 6 年生 男児

○障害と困難の内容

◎知的障がいを伴う自閉症

- ・音楽が好きで、ラジカセや iPad、おもちゃから流れる音楽を聴いて声を出したり、ぴょんぴょんと飛び跳んだりして楽しんでいる。
- ・有意な発語は見られないが、生活の中で使う単語はいくつか理解しており、言葉での指示（着替えをするよ、こっちおいで、座るよなど）や周囲の状況を手掛かりに行動することができる。逆に、指示待ちが多いことも。
- ・苦手なこと（意図した言葉かけと違う、見通しが持てない、暑い、お腹すいたなど）の場面でパニックを起こし自傷、他傷する。



【活動進捗】

○当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

- ・着替えや歯磨きなど日課となる活動に対して、動画によるビデオモデリングから「これから何をする、次は何をする」など見通しを持って、気持ちを落ち着かせて進めることができる。
- ・絵カードやシンボルを使ったコミュニケーションの手段を理解し「〇〇したい、〇〇してほしい」を伝えることができる。

※「一人で取り組むことができた」による気持ちの安定と「コミュニケーション手段の獲得」による安心感や満足感が一体となって自傷、他害、パニックの減少が期待できるのではないかと。

○実施期間：平成 28 年 5 月～

○実施者：赤嶺太亮

○実施者と対象児の関係：学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ①怒ったり、自分や相手を叩いたりして自分の思いを伝えるということが頻繁に見られる。その場面を分析すると、例えば、着替え場面で「洋服を脱いで次は〇〇をして〇〇をする」に見通しが持てない、指示がわからないときに活が滞ってしまう。その際の言葉かけが本人の意にそぐわなかったり、わからない指示が多くなったりすると次第にその不安が募ってパニックを起こす。また突然、フラッシュバック的に何かを思い出したかのように泣き出すことがある。
- ②また、「お腹が空いた、おもちゃで遊びたい」などの気持ちがあっても伝える手段が少ない、伝わらない不安が募ったり、期待したものと違う言葉かけの場面で突然叩いたり怒ったりする。

○活動の具体的内容

①見通しが持てない、指示理解が難しいことに対して

対象児は、朝の支度や帰りの支度で不適応行動の回数が多かった（グラフ 1）。支度では教師が「次は洋服脱ぐよ」など言葉かけや指差しの支援で行っていたが、その言葉かけの理解が難しいこと、次何をするのか見通しがもてないことによる不安が「怒る、叩く、なく」といった形で現れていた。そこで、iPad で録

画された動画を提示してビデオモデリング（写真1）を朝の支度場面と帰りの支度場面で行うことにした。なぜ動画にしたのかについては、動画と音声で活動をイメージしやすい、一目で何をするのか見通しがもちやすいと考えたから。また、iPadを使うと、持ち運びが簡単で動画を簡単に作ることができる。そして、当初は教師がiPadの動画を提示することで進めるが、いずれは対象児が自分でiPadを操作して活動ができるようになることも見通して、実践を進めた。



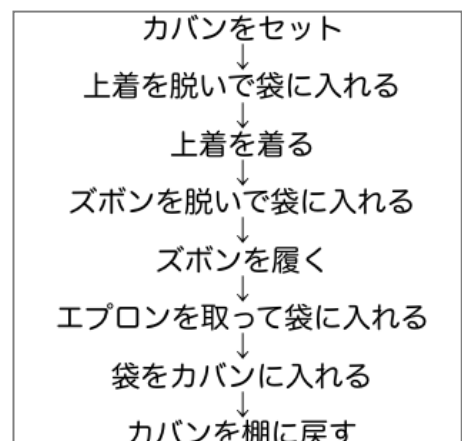
グラフ1 対象児の「怒る、叩く、泣く」の回数（4/18～5/1の合算値）



写真1 動画を見て洋服を脱ごうとする対象児

《動画の作成方法と留意点》

- 情報の精選
(短めの動画にする、動画の区切り方やつなぎ方)
- 動画中に活動に合った言葉
(洋服を脱ぎます、次はズボンを脱ぎます、など端的な言葉で)
- できたことのフィードバック
(動画一つ一つに「よくできました、おわり」のセリフと拍手)



例：帰り支度のモデリング

②要求手段を持たないことに対して

「怒る、叩く、泣く」ではなく、「好きなことも苦手なことも適切に表現すれば伝わるし得られる」を対象児に感じて欲しいと考えた。ここで、対象児の適切な表現方法を支えるものとしてiPadや写真カードが使えるようになるためには、そもそも対象児が「〇〇したい!」と伝えたいような場面でまずは試してみる必要がある。ここで、グラフ1を見てみると、4校時や給食時間に不適応行動の回数が多いことが分かった。「ご飯が食べたい」という気持ちがうまく伝えられず、その不安が「怒る、叩く、泣く」といった形で現れていると考えた。そこで、まずは給食場面で気持ちを伝える手段として写真カードやiPadが使えるようになることを目指した。対象児が怒ったときに「何か言いたいのか?これで教えて」と言って手をとって促したり、何か伝えたい様子で見つめてきたときに「何?」と聞き返してカードを取るよう促したりした。



写真2 給食場面での写真カード
(理由があって家庭から弁当を持参)



写真3 写真カードを手渡す対象児

○対象児の事後の変化

①見通しが持てない、指示理解が難しいことに対して

6月当初：この時期は、まだ「なんだろう?」といった様子で動画を観ていた。特に、動画を観た後かならず様子をうかがうように教師の表情を見るが多かった(写真4)。これは、対象児がこれまでの数年間、教師から言葉かけや指差して支援を受けてきたことによる結果が行動に現れていたのではないかと。今までの経験から、「指示待ち」になってしまっていて、提示された動画を観ながら何となくやることはわかっているんだけど「これでいいんだよね?」といった表情で教師の様子をうかがっていた。

7月中旬：この頃には、提示された動画をチラッと観ながら「洋服を脱いで、次は片付ける」などほとんどの活動がスムーズにできるようになり、次に何するか活動の流れがわかってきた(写真5)。「ズボン履く→エプロン取る」など幾つかの活動は動画を観なくても自分から進んでやる、「次はなに?」といった表情で教師の様子を見ることもほとんどなくなり、見通しを持って活動している様子がうかがえた。



写真4 6月当初「これでいいの?」といった表情で教師を見る対象児

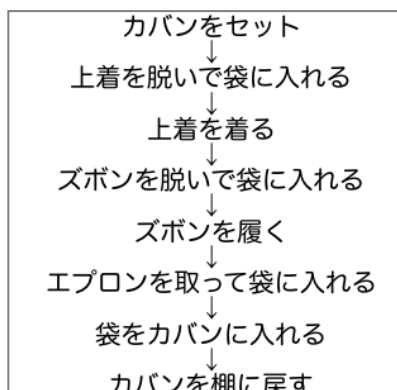


写真5 7月活動の流れがわかり進んで取り組む対象児

12月頃：2学期以降、固定されたiPadを見ながら対象児が一人で着替えを進められるようにした（写真6）。教師の支援が必要な部分もあるが、ほとんどの活動を一人で進められるようになってきた。何をするか見通しも持っていて、着替え中に「怒る、叩く、泣く」といった行動がほとんど見られなくなった。



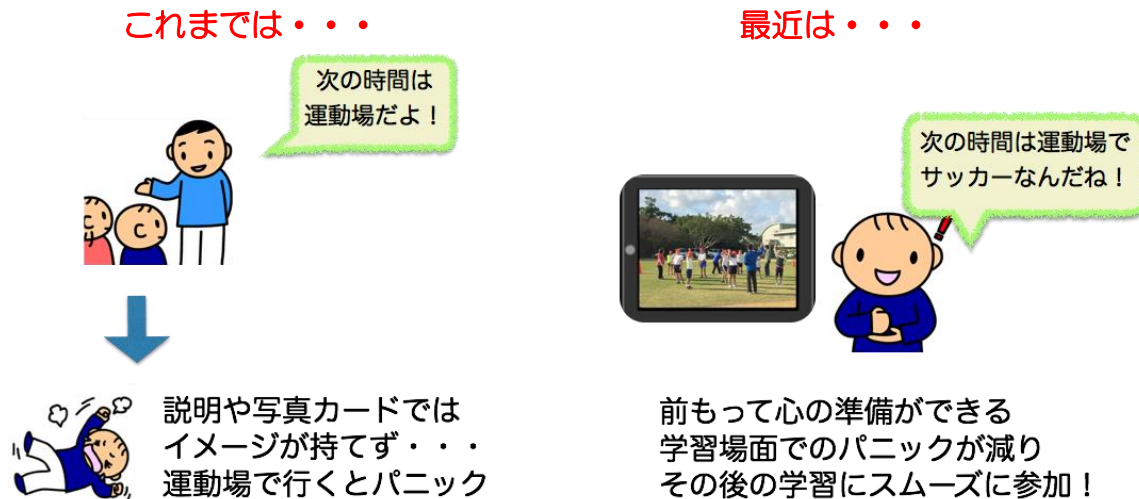
写真6 固定されたiPadを見ながら着替えを進める対象児



タップして動画を進めていくことが対象児には難しかった。そのため、「カバンをセット×2回流れる→上着の脱いで袋に入れる×2回流れる・・・」など動画が連続で再生されるように動画を編集した

【その他エピソード】

2学期から、「これからどんな学習をするのか」をiPadで動画を提示して次時への見通しが持てるようになった。苦手だった体育館やグラウンドでの学習にもスムーズに参加できるようになり、学習場面でパニックを起こすことが減った。



②要求手段を持たないことに対して

6月当初：給食を食べている途中、「お家からの弁当が食べたいよ～、水筒の蓋を開けて欲しいな～」の気持ちや伝えられず、自傷したり激しく怒ったりすることが頻繁に見られた（写真7）。写真カードを提示してもチラッと見るだけ、またはトントンと写真カードを叩いたり教師に手渡したりという行動が見られても伝えたい気持ちと写真カードが一致しないことが多かった。

7月中旬：1ヶ月ほどで写真カードを使ったコミュニケーションを理解し、伝えたいことにあったカードを手渡すことができるようになった（写真8）。また、目を合わせて様子をうかがう、指差し、

身振りなどで教師に伝えようとすることも見られるようになった。これは、「伝わった」という楽しさを積み重ねることで「もっと伝えたい」気持ちが高まってきた結果だと考える。



写真7 6月当初「これじゃないのに～」と
気持ちが伝えられず怒る対象児



写真8 「弁当が食べたい」と写真カード
を手渡す対象児

12月頃：ツールを使ったコミュニケーションを理解し始めた対象児に対して、その表出の幅を広げるため2学期以降、iPadのコミュニケーションアプリ「ドロップトーク」を活用した(写真9)。iPadを使ったコミュニケーションを理解し、様々な場面で「おもちゃで遊びたい」「ゼリーが食べたい」「先生を呼ぶ」など気持ちを伝えられるようになった(写真10)。気持ちが安定し、怒ったり叩いたりすることが少なくなった。



写真9 Droptalk の画面



写真8 「おもちゃで遊びたい」とシンボル
をタップして訴える対象児

【その他エピソード】

写真8は給食前の場面である。これまで見られた「怒る、叩く、泣く」ではなく、「おもちゃで遊びたい」「おなかがすきました」と落ち着いて伝えられるようになった。「おなかが空きました」の場合、すぐに給食が出せない場面でも対象児はしっかり待てるようになった。これは、ここまでの過程で対象児が「好きなことも嫌なことも適切に表現すれば伝わる」経験を積み重ねてきたこと、そして気持ちを伝えられる手段(iPad)がそばにあるという安心感を感じている結果だと考える。

【報告書の気づきとエビデンス】

○報告者の気づき

見通しが持てた、適切に気持ちが伝えられるようになった結果、より楽しく生活できるようになった

取り組みの前の対象児は「活動に見通しが持てない」「指示理解が難しい」「要求手段を持たない」が原因で、不適応行動（怒る、叩く、泣く）が多かった。iPadを活用したビデオモデリングやコミュニケーション支援によって、「見通しが持てる」や「コミュニケーション手段の獲得」による安心感から学びに向かうための気持ちの安定が得られた。今の対象児は、教師や友達の顔を覗き込んだり、手を引いたりして「遊んで」とアピールすることが増え、これまで怒ったり泣いたりすることが多かった集団活動にも笑顔で参加する場面が見られるようになった。

○エビデンス

対象児の「怒る・叩く・泣く」といった不適応行動の回数を取り組み前後で比較した（グラフ1）。その結果、「怒る・叩く・泣く」の回数が当初よりも減っているのがわかった。全体を通して不適応行動が減ったことについては、ビデオモデリングで活動の「見通しが持てた」こと、写真カードやiPadで「好きなことも嫌なことも適切に表現すれば伝わるし得られる」という気づきや楽しさを積み重ねた結果だと考える。実際に帰りの支度場面では、動画を観ながら自分で活動できることが増えている（表1）。

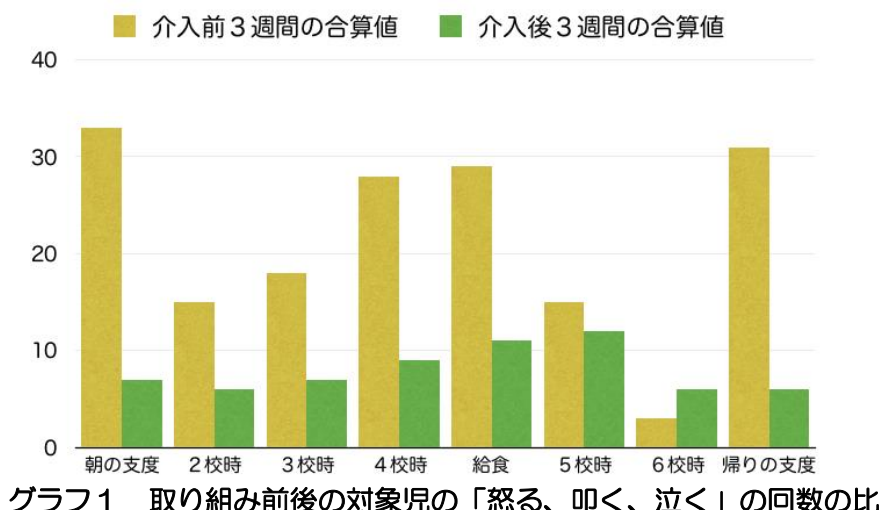


表1 帰りの支度場面における対象児の行動

	ベースライン		ビデオモデリング (動画がiPadを提示)				ビデオモデリング (固定されたiPadを自分で観ながら)			
	5/24	6/3	6/7	6/14	6/30	7/5	10/19	10/31	11/9	11/21
カバンをセット	×	×	△	○	○	○	△	△	△	△
上着を脱いで袋に入れる	△	△	△	○	△	○	○	○	○	○
上着を着る	×	△	×	△	△	△	△	△	○	○
ズボンを脱いで袋に入れる	△	△	△	○	○	○	△	△	○	○
ズボンを履く	×	×	△	△	○	○	×	△	○	△
エプロンを袋に入れる	△	×	△	△	○	○	○	○	○	○
袋をカバンに入れる	×	×	×	×	△	○	×	×	△	△
カバンを棚にもどす	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○

○：自分からできた △：支援ありでできた（言葉かけや指差し） ×：やらない